

## ●「アテネ・オリンピック帯同記: 聖火ランナーからチームドクターへ」

岐阜県ラグビーフットボール協会 副会長

岐阜県ホッケー協会 副会長

きくいけ整形外科 院長 喜久生明男(昭和 40 年卒)

2004 年夏のアテネと言えば、暑い、ドーピング、日本選手の大活躍でした。

私とオリンピックの関連は遡ること 40 年になります。アジアで最初のオリンピックが 1964 年に東京で行われ時に、日本中をくまなく走る聖火リレーの発想のお蔭で、当時 17 歳の高校三年生であった私は大街道～松山市駅までの 2.2 km を沿道の大観衆の中、トーチを掲げて走りました(図 1)。東京オリンピックを開催するにあたって新幹線が生まれ、高速道路ができ、カラーテレビの普及がありました。

松山東高でタイミングよく高校 3 年生で、ラグビー部所属で生徒会活動をしていたことが選ばれた理由だと思います。更に、不思議な縁は東京オリンピックの開会式をスタンドで見れ(愛媛県教育委員会から派遣された)、ホッケー競技を観戦(入場券がホッケーしか取れなかったと想像)したことが、その後の関係のプロローグだったのかも知れません。

翌年 3 月に岐阜大学医学部に進学し、大学では野球をやっていましたが医学部卒業後、スポーツに一番関連が深い整形外科を選び、何時かはオリンピックに何らかの形で参加したい夢を持っていました。

ホッケーとの関連が深まったのは、昭和 56 年に県立岐阜病院へ赴任してからのことです。病院の近くに全国の強豪、岐阜女子商業高校(現:岐阜各務野高校:平成 17 年 4 月より)があり、監督はメキシコオリンピック日本男子ホッケーの代表選手だった、安田善治郎教諭でした。その高校のホッケー選手が怪我で病院を受診し、治療している内に、安田監督との信頼関係ができ、沖縄国体で初めて岐阜女子商業ホッケー部のスタッフとして帯同し、ホッケーの世界へのめり込むきっかけとなりました。安田監督が全日本女子ホッケーの監督に就任してからは昭和 62 年のインド遠征へ日本ホッケー協会初のドクター帯同があり、その後も毎年 1 回は海外遠征に約 3 週間帯同し、安田ジャパンの躍進のお蔭で、インドからシドニー(女子ホッケーワールドカップ)へと進むことができました。日本協会の人事で、シドニー以後は天理大学の恩田監督がジャパンの監督となり、アジア大会銀メダルを頂点としましたが、オリンピック出場はなりませんでした。4 年後に再び安田ジャパンとなってからは、日本が世界で勝つためにはフィジカルに走り勝つことと組織プレーしかないとの方針で岐阜県各務原市の岐阜県グリーンスタジアムにて徹底的に選手が鍛え抜かれ、そして、幾多の国際大会で好成績を挙げ、オリンピック予選への出場権を勝ち取りました。アテネオリンピック女子ホッケー競技は 10 カ国で争われますが、出場資格は 5 大陸代表(5)、開催国(1)、オリンピック予選(4)ですが、開催国ギリシャが辞退したため、予選 5 位までが出場出来る事になりました。5 大陸の代表はヨーロッパ:オランダ、アフリカ:南アフリカ、アジア:中国、オセアニア:オーストラリア、アメリカ:アルゼンチンであり、2004 年 3 月のニュージーランドでのオリンピック予選では、5 位通過の目標で望んだ日本でしたが、波に乗って優勝し、結果的には日本、スペイン、ドイツ、ニュージーランド、韓国の順位でアテネ出場権を獲得し、優勝した日本は一気に世界のホッケー界からも注目されることになりました。日本女子ホッケーが誕生して 80 年、女子ホッケーがオリンピック種目となって 24 年、日本女子ホッケーが夢に見たオリンピック出場となったのでした。私はオリンピック予選の現地へは行きませんでした。毎日の試合結果と選手の状態をメールで受けながら、投

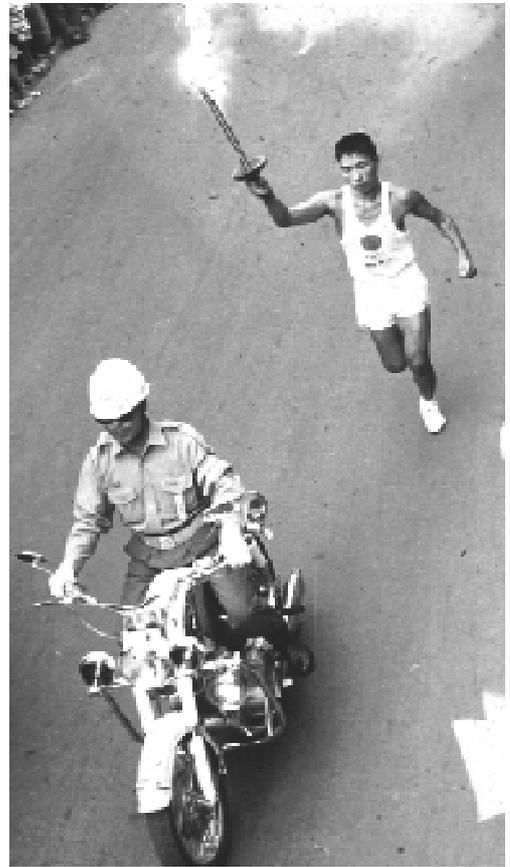


図 1: トーチを掲げて走る筆者

薬等について指示を与えていました。メールでのやり取りだけでもエキサイティングなオリンピック予選でしたが、さぞかし、現地での喜びの爆発はたいへんなものだったと思います。

オリンピック出場が決まってからは、女子ホッケー界は色んな面でマスコミに取り上げられ、ホッケーと言えばアイスホッケーと言われてきた競技がホッケーとはフィールドホッケーの事であることを正しく世間に理解していただけるようになった事が、何よりの貢献だったと思います。特に岐阜県では女子ホッケーの初参加に伴い、多数の岐阜県出身選手がオリンピックというスポーツ選手にとっての夢の舞台へ出場という快挙をやってくれました。私もインド遠征への帯同から約 20 年ドクターとして日本女子ホッケーに携わり、オリンピック出場が決まってから安田監督から先生アテネへ行けますねと言われた時には、直ぐに、万難を排して行きますと即答しました。自分にとってもオリンピックは夢の舞台、40 年来の願いでした。

さて、第 28 回アテネオリンピックは第 1 回の 1896 年から 108 年を経て、発祥の地で再開催されたのですが、202 カ国、16000 人の選手役員が参加し、注目すべきは女性の参加が史上最高の 44% に達したことです。日本選手団は選手 312 名、役員 201 名の計 513 名が参加し、女性選手は 171 名、男性選手は 141 名であり、選手の中で女性は約 55% を占めており、世界に先立ち、女性優位でした。

日本オリンピック委員会は 1 年前からアテネ調査を入念に行っており、競技場や選手村の準備状態だけでなく、気象、食物、水（硬水です）などを調べ、オリンピック選手への対策本（五輪書）を完成させ、支給衣類もそれに沿った物を準備してくれ、一番の問題は暑さであるとのふれこみでした。ホッケーは特に激しい運動量を要求されますので、選手の熱中症対策が競技成績を左右するポイントであろうと予測していました。競技場では運動して発熱した身体をいかに早く冷やすか、暑い中での運動で失われた、水分と電解質をいかに早く取り戻すかが勝負だろうと想定しました。競技場での暑さ対策としてはアイスジャケット（氷入りベスト）、氷嚢など以前より日本チームは使用していましたが、脱水症対策として点滴用液を 15 リットル準備しました。競技では 10 分間のハーフタイムがとても大切で、ハーフタイムのロッカールームは前半の反省を踏まえた戦術の確認、変更があり、体温の上昇した選手のクーリングと疲労回復、故障選手はテーピングをする時間でもあります。熱取りのアイスジャケットだけでは、いくらエアコンの効いたロッカールームでも、熱を取ることは十分ではありません。更に、ロッカールームは風が吹かない部屋ですので、選手が一同に集まれば熱気の溢れた密室となってしまいます。熱を取るには身体に接した空気の対流が必要なのです。もちろん扇風機があればよいのですが、大会前にやっと出来上がった競技場ですので事前調査不可能でした。その事を考えて、秘密兵器として岐阜の団扇（直径約 60cm）を密かに 5 本準備しておきました。してやったり、競技場のロッカールームには扇風機は無く、岐阜の団扇は多いに役立つ事になりました。しかしながら、予測とは違ったものがありました。日中の気温は 40 度近くになり、日差しは焼け付く強さですが、日本と違ってベトベトしないのです（日本の夏の湿度は 80% 前後）。持参した湿度計は 30% 後半から 50% 位（平均 40% 前後）を示し、更に、海辺に位置した競技場は夏のエーゲ海特有の季節風、メルテールが吹き、風が強く、直射日光さえ避ければ、すがすがしく、日本では高原の避暑地にいる感覚でした。汗による放熱効果は高く、水分、電解質の補給に気をつければよい事になります。実際、点滴溶液は 3.5 リットルしか使わずにすみました。アテネオリンピックのホッケー競技では試合時間が午前中 2 試合、午後 6 時以後 2 試合と午後 0 時から午後 6 時までの暑い時間帯にはゲームが組まれていません。これは単に暑さのためだけでなく、ギリシャ古来からの知恵、フィエスタ（午睡）の伝統からかも知れません。更に、ゲーム中の怪我でドクターがピッチ上を走る事は一度もありませんでしたが、散歩で足関節を捻挫して痛みが強く、翌日には加重することすら出来なく、試合出場が危ぶまれた選手が、3 日目には局所麻酔と鎮痛剤の服用、そしてテーピングにて、痛いながらも試合に出場し、2 点をあげて、日本の歴史的初勝利に貢献し、新聞紙上を華々しくかざったあの選手の陰には、ドクターの隠れた治療があったことは知られていません。

宿泊は選手村でした。アテネ市内の北 20km に位置し 124 万平方 km のオリンピックビレッジでは鉄筋 4 階建てのマンションが立ち並び、一部屋 2 人の生活空間で 1 フロアーにベツトルーム 8、トイレ 2、バス・トイレ 2、広いリビング 2 部屋でした。日本選手団の宿舎は選手村の中では最高によいロケーションにあり、メイン食堂には歩いて 1 分、出発、帰宅に利用するバスセンターには歩いて 3 分の所でした。先に述べましたが、夜は窓を開けて寝るには涼しすぎるくらいで、エアコンもほとんど使用しませんでした。ホッケーチームは 3 階と 4 階を使用し、1 階と 2 階は女子ソフトボールチームが使用してい

ました。隣の棟には柔道、バレーボールの選手がおり、テレビで見た事のある選手と毎日挨拶をかわしていました。選手村への入村には空港のボディチェックと荷物のレントゲン検査と同じことを毎回行う必要がありました（図2）。村には病院、警察、郵便、銀行、雑貨屋、お土産屋、旅行社、レコード屋、自転車のレンタル等々、何でもありましたが、身近な所ではアルコール類は村外に買いに行かねばなりません。病院ではレントゲンもリハビリもオーダーすれば、利用できるシステムでしたが、お世話になる選手はいませんでした。病院へはドーピング検査のために必要な TUE（Therapeutic Use Exemption 目的使用の適用措置：ドーピング禁止薬でも事前申告に



図2:選手村の中で。筆者(左)、ホッケー選手の千葉選手(中央)と小森選手(右)

て使用可能な治療薬を使用するため)の書類をオリンピック委員会の緑色のポストに投函したくらいでした。村は広く、散歩やランニングをする芝生の緑のベルトが続き、噴水にベンチもあちこちにあり、広い村の交通機関は北回りと南回りの循環バスがメインです。生活の楽しみには1日3度の食事がありますが、選手村の食堂では24時間オープンのパイキング方式で、IDカードさえ首からぶら下げていると、好きなものを、好きなだけ、何度でも食べられました。勿論、入村時に1食2500円位の計算で支払い済ですので、沢山食べると元が取れるというものですが、オリンピック競技中の生活では無茶するのはドクターくらいでした。世界中から選手は集まり、宗教的習慣を含めて生活習慣が違うため、料理は成分を明らかにしていました。私は専らギリシャ料理を好んでいただくと共に、毎食みそ汁、フルーツ、食後のアイスクリームと3食ともフルコースでした。一番の好物となったのはトマト・ゲミスタ(トマトの中に味付けご飯をつめて煮たもの)、ムサカ(肉、なす、ジャガイモの重ね焼き)、カラマラキア(イカ・リング)でした。

競技場はアテネ市内の南に位置し海に面した広大な競技場の集まり(ヘリニコ・オリンピック・コンプレックス)でした。飛行場跡地であり、ホッケー、野球、ソフトボール、カヌー/カヤックのスラローム、バスケットボール、ハンドボール、フェンシングの会場が隣接していました。会場までは村からバスでの送り迎えで、高速道路を含めてオリンピック専用レーンを利用して約30分でした。ホッケー競技場はピッチが主会場、副会場(練習会場でも使用)、練習専用会場の3面あり、人工芝の立派なグラウンドでした。主会場はオリンピック開催にぎりぎり間に合ったとはいえ、施設としてはロッカールーム(トイレとシャワー付き)に備え付けの扇風機が無い以外は素晴らしいものでした。

オリンピックの華の一つは開会式です。ホッケーは翌朝に試合を控えているため、ホッケーチームの代表として団長とドクターの2名が参加しました。午後1時にバスセンターを出発し、集合場所のアリーナで待つ事4時間、列に並んで2時間かけて牛歩で入場門までたどり着き、行進と会場内で2時間過ぎ、帰村するバスを待つ事3時間でした。要するに、準備に10時間を費やして、華やかな入場行進をして楽しんだのが、30分くらいと考えて下さい。開会式はよかったね!と言っていた最初のセレモニーやショーは会場の外で、ただ会場内の歓声を聞いていただけなのです。開会式はテレビで見ると一番なことを実感しました。ただ、会場内では旗手の浜口京子さんと写真を撮ったり、会話をかわすことが出来たのは、やはり、実際の参加者の特典だったのでしょう(図3)。

さて、いよいよ、オリンピック競技の開始ですが、ホッケー競技では5チームずつの2グループによる予選リーグ戦を行い、その後順位決定戦をすることになっていました。Aグループはアルゼンチン、中国、日本、スペイン、ニュージーランドであり、Bグループはオランダ、オーストラリア、南アフリカ、ドイツ、韓国でした。結果的には世界の2強と言われた、アルゼンチン、オランダを倒して予選3

位で出場したドイツが金、オランダ銀、アルゼンチン銅メダルとなり、アジア最強の中国は4位となり、メダルには届きませんでした。日本は予選2勝するも結果は8位で終わってしまいました。

大会期間中の選手に対する処置は競技開始前はアキレス腱に注射1名1回（TUE）、日光皮膚炎にてステロイド外用剤使用1名（TUE）、点滴4名、腰痛等にて投薬3名の計9名でした。競技開始後はアキレス腱に注射1名1回（TUE）、生理痛3名、扁桃腺炎1名、点滴3名、打撲2名、下痢3名、湿疹1名、蕁麻疹1名、捻挫1名（局注を要した）の計15名でした。アテネにて何らかの医療行為を必要とした選手は16名中14名でした。また、2名の帯同トレーナーは選手の日々のコンディショニングづくり（練習、試合のテーピングを含めて）に奮闘していました。番外としては日本からの応援団に3名（発熱、腰痛、腹痛）に投薬を行い、海外遠征時には応援団の医療にも配慮が必要（？）なのかも知れないと感じてしまいました。選手の熱対策として準備した点滴溶液は3.5リットルしか使わずにすみ、ゲーム中の怪我でドクターがピッチ上を走る事は一度もありませんでした。

アテネオリンピックでは競技場、選手村、食事、輸送などで問題は生じず、ギリシャは見事にオリンピックをやりとげたと思います。日本女子ホッケーもメダルには手が届きませんでした。夢の舞台で2勝をあげたことは大成功と言ってよいと思います。今回のオリンピックでは国際オリンピック委員会（IOC）と国際アンチ・ドーピング機構（WADA）が手を取り合って望んだ初めての大会でしたので、ドーピングに対する姿勢は厳しいものであったことは室伏選手の金メダルが物語っています。選手村では競技外検査としてWADAが主体の尿と血液のドーピング検査を行い、競技会場ではIOC下の各競技団体が尿のドーピング検査を行ったのは言うまでもありません。ドーピング検査総数、3505件を行い、18件の違反者を発見し、14件には当該試合の資格剥奪（アテネ大会からの追放12名）、今後のオリ



図4: 日本女子ホッケーチーム



図3: 開会式で旗手の浜口京子選手と

ピック大会参加資格の喪失4名の裁定を行っています。メダルの剥奪は7名でした。それ以上に、今回の大会ではドーピング疑惑選手の不参加が多く、このことが東京オリンピック以来の日本のメダル獲得数の好成績につながった要因の一つではないかと考えられています。

オリンピックの閉会式の日帰国の途につきましたので、閉会式を味わうことは出来ませんが、選手全員が元気で帰国できたことがドクターとしては最高の喜びでした。